

令和6年度企画展

丹沢に魅せられた人々

令和6年8月10日(土)～10月6日(日)



「渋沢丘陵から見た春先の丹沢」昭和40年代 撮影岩田傳三郎

はじめに

週末の秦野駅や渋沢駅では、「ヤビツ峠」や「大倉」行きのバスを待つ登山客が長い列をなしており、丹沢の山々は多くの人々を魅了していることがわかります。

本企画展は、平成28年度(2016)

に国民の祝日となった「山の日」に合わせ、近代登山黎明期に丹沢に魅せられた人々、令和5年(2023)に発足90年を迎えた秦野山岳会、そして、多くの丹沢の写真を残した岩田傳三郎に焦点をあて、丹沢登山の歴史や文化について解説します。

丹沢登山黎明期のアルピニスト

アーネスト・サトウと蓑毛の閻魔

幕末から明治時代に日本を訪れ、イギリスの外交官として活躍したアーネスト・メイソン・サトウ(Ernest Mason Satow)は、仕事の傍ら日本各地を旅行しています。また、山好きで富士山や箱根など多くの山々を訪れています。

明治6年(1873)に横浜のイギリス領事裁判所の裁判官ハンネンとその妻、同僚アトキンソンとともに大山から宮ヶ瀬を訪れ、その途中で秦野市内の蓑毛地区に1泊しています。その際、彼は「蓑毛周辺にはいくつかの仏教寺院があり、その中の一つには悪鬼を描いた見事な所蔵物がある」と記しています。この悪鬼は蓑毛地藏堂に安置されている市指定重要文化財 木造十王坐像だったのかもしれない。



木造十王坐像 (宝蓮寺)

丹沢を登ったアルピニストたち

明治時代の中頃から山を登ること

を目的とした登山が始まりますが、明治時代後期になっても箱根や大山が代表的で丹沢の山々に登ることは稀でした。

そのような中、日本博物学同志会に所属していた武田久吉、高野鷹蔵、河田(山川)黙ら



『山岳』第一年一号 (復刻)

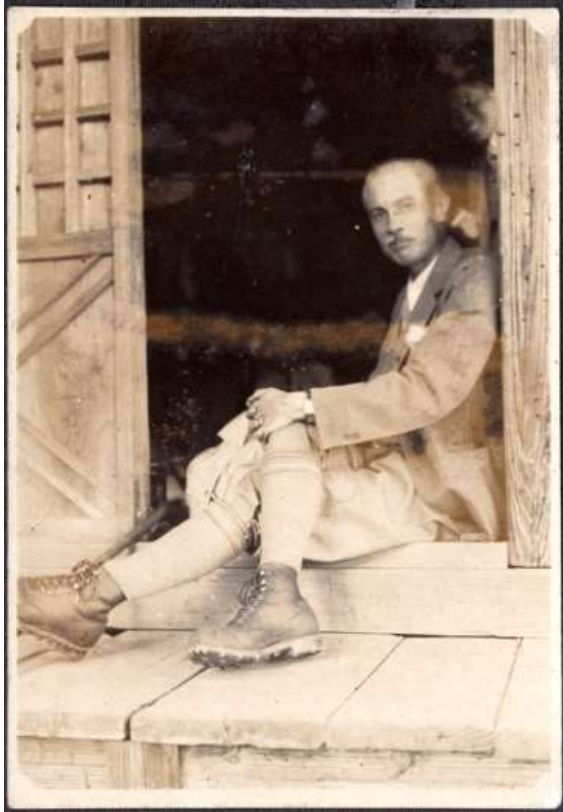
11人が、

明治38年(1905)に植物、蝶、岩石採集を目的に玄倉川から塔ノ岳に登り、その時の記録を高野が『山岳』第一年第一号(明治38年(1905)刊行)に発表します。後年、武田は『明治の山旅』において、高野のこの掲載を多くの登山家に最初に丹沢を紹介したものであり、山小屋が経営されるほど、訪問者が多くなったきっかけと評価しています。

武田久吉と丹沢

武田久吉は、アーネスト・サトウと武田兼との間に生まれた次男で、京都帝国大学等で講師を務めた植物学者です。上述した他の2名らと日本山岳会を創設しました。

武田は、蛭ヶ岳や丹沢山にも登り、その記録について『山岳』に発表



武田久吉

しているほか、大正13年(1924)に「丹澤山塊略説」を雑誌『科学知識』に3回にわたり連載し、丹沢の全貌を明らかにしました。

神奈川県青年联合会主催による関東大地震の被害状況についての講演会が大川旅館で開催され、武田のほか2名の専門家が講師を務め、翌日の視察登山についても武田は同行し、その記録について報告しています。

塔ノ岳に登った岡野金次郎

日本博物学同志会による塔ノ岳登山の14年前、この山を岡野金次郎は登っていました。彼は横浜生まれですが、13歳で父親を亡くした後、母親の実家がある市内西地区をよく訪れ、

裏山をよく歩き回っていました。

彼はスタンダード石油横浜支店に就職し、その支配人ハッパーを介して、「近代登山の父」とも言われるウォルター・ウエストンの著作『日本アルプスの登山と探検』と出会い、感銘を受け、横浜に住んでいたウエストンを訪ねます。

ウエストンの山岳会設立の強い勧めを受け、会(後に日本山岳会と改称)発足のきっかけを作りました。晩年は、平塚市に居住し、好きな富士山を眺めていたといわれます。



岡野金次郎 顕彰碑 (平塚市湘南平)

秦野山岳会と登山文化

秦野山岳会の結成

武田らの活動の成果により丹沢山塊の名は有名になりましたが、昭和2年(1927)の小田原急行鉄道(現小田急)の開通により大秦野駅(現秦野

駅)や渋沢駅から入山できるようになりますが、開通当時は、伊勢原駅から大山への宣伝が主体的だったと言われています。

昭和5年(1930)に横浜山岳会が創設され、雑誌『ハイキング』18号(昭和8年(1933)刊行)に「丹澤山塊の全貌」を掲載します。一方、秦野町青年団は、昭和6年(1931)に北村八郎、漆原俊らを中心に丹沢踏査を行っていましたが、これに触発され、昭和8年に北村八郎を会長として秦野山岳会を結成します。



秦野山岳会 初代会旗

秦野山岳会の活動

秦野山岳会は、昭和10年(1935)に武田久吉の「丹沢の今昔と将来」という論文のほか、20の登山コースを紹介した『丹沢山塊』という案内書を刊行しました。また、同年に雑誌『ハイキング』において丹沢山塊の特集号が刊行され、同会会員の漆原俊により、沢や頂の呼称が記載された「丹沢山塊概念図」が発表されました。



漆原俊「丹沢山塊概念図」

この年の活動は活発的で、11月には秦野山岳会と秦野町青年団の共催により「丹沢の講演会と映画の夕べ」が開催され、武田久吉や横浜山岳会の会員らが講演を行い、「秋の丹沢山」「残雪の丹沢山」といった映画が上映されました。参加者は、翌日に札掛から塔ノ岳へ登っています。

昭和13年(1938)に秦野山岳会によって、本格的な丹沢山塊の案内書『丹沢』が刊行されます。この著書には、武田久吉や横浜山岳会会員の寄稿のほか、秦野山岳会会員も執筆しており、登山ルートの紹介、植物、民俗伝承、丹沢山塊関連書籍一覧が掲載されています。また、昭和10～11年(1935～1936)に遭難事故が多発したことを受け、遭難事故の詳細なレポートを掲載し、読者への注意喚起も行なっています。同年には、指導を仰いでいた武田久吉が同会の顧問に就任しています。

山と溪谷社の主催により昭和16年(1941)に「丹沢座談会」が開催され、

丹沢山塊は全国的な関心へと広がっていきます。

尊仏小屋の建設



初代 尊仏小屋

昭和10～11年(1935～1936)に遭難事故が多発したことを受け、横浜山岳会は塔ノ岳の山頂に山小屋を造ろうとします。山小屋「尊仏小屋」の建設は、昭和13年(1938)に地鎮祭が行われ、翌14年(1939)11月19日に落成しました。

尊仏小屋は、戦時中に倒壊、再建されるも荒廃し、戦後の昭和24年(1949)に再再建されます。その後、第10回国民体育大会開催のため、昭和30年(1955)に小屋の隣に「尊仏山荘」を神奈川県が建設します。

戦後の登山ブーム

戦時中に荒れた丹沢林道や登山道の復旧工事が行われ、昭和25年(1950)頃から登山者やハイカーが増え始め、『神奈川新聞』に「賑わう丹沢」「丹沢若い男女で賑わう」などの見出しが紙面を飾るようになり

ます。一方、高校山岳部員の遭難事故が発生し、4名が死亡するなど遭難事故が多発しました。

第10回国民体育大会(神奈川県)が開催され、山岳競技場の会場となった丹沢山系は、登山者が急増したことによる自然破壊が行われます。自然保護の強化から昭和35年(1960)に県立丹沢大山自然公園に、昭和40年(1965)に国立公園に指定されます。丹沢登山者は、昭和30年代半ばにピークを迎え、レジャーの多様化とともにその数を減らしていきました。

近年、マスメディアや健康志向により登山が注目され、47万人以上の登山者が令和4年(2022)に丹沢へ訪れています。



玄倉川のキャンプ(昭和35年(1960))

丹沢を愛した岩田傳三郎

岩田傳三郎

岩田傳三郎は旧西秦野町に生まれ、戦前から秦野山岳会に入会し、登山の技術や知識を深めていきます。



岩田傳三郎 平成9年(1997)

戦時中は学徒動員で満州の工兵部隊に入隊しますが、復員後、秦野山岳会の中心メンバーとして会の運営や機関誌編集に携わりました。

その後、秦野山岳会を離れ、「恋峰山岳会」を設立、合わせて「秦野市山岳協会」を立ち上げました。

また、写真店経営の傍ら、丹沢山に「みやま山荘」を建て、昭和40(1965)年から本格的に営業を始めました。昭和57年(1982)には、「みやま山荘」に宿泊された天皇陛下(当時浩宮様)の案内役を務めました。

山岳団体や国体山岳部での活動、自然保護運動や丹沢美化運動の功績により、昭和58年(1978)と平成4年(1992)に神奈川県知事から、平成8年(1996)には環境庁長官から表彰を受けました。



冬の天王寺尾根 (撮影岩田傳三郎)



不動の滝葛葉川滝の沢 (撮影岩田傳三郎)

発行 令和6年8月10日

編集 はだの歴史博物館

〒259-1304 神奈川県秦野市堀山下 380-3

電話 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794